

2014年9月21日

礼拝メッセージ

「靈的戦いの基礎4 戦いの占領地はどこですか」

聖書箇所：ルカ6章39～45節、マタイ7章1～23節、士師記16章18～31節

遠藤 一則 牧師

昨日、何人かの兄弟と一緒に韓国料理店に行きました。ひとりが誕生日だったので、一緒に食べに行こうということになりました。割り勘です。行く途中、のどがかわいたので道の駅によって飲み物を買いました。すると一人の人が近づき、兄弟に言うのです。「久しぶりだねえ。あなたがイエス様を信じたと聞いて、こんなにうれしいことはない。」と心から喜んでおられるのです。彼と兄弟とは、かれこれ十年來の知り合いです。一緒に音楽をしたり、教会で交わったり、お互いに楽しい思いをしましたが、結局のところ、一番うれしいのは一人の人が主にたちかえったことだったのでした。そして、喜ばれた当の本人もその相手の喜びようを見てうれしいのでありました。先週、靈的戦いの武器は喜びにあるといいましたが、まさに彼らの喜びは靈的戦いの勝利であり、同時にそれが武器にもなるということです。

と同時に彼の喜びはわたしたちに戦いの占領地とは何か、をも教えてくれているのです。なぜか？彼はただ兄弟がイエスを信じた、ということを知りただけで喜んでおられるのです。信じた証拠は何かとか、信じてその人がどんな素晴らしいことをしたとか、何も確認していない時点ですでに喜んでおられるのです。それはわたしたちの戦いの占領地が、行いや実にあるのではないことをあらわしています。ではどこにあるのか。戦いの占領地はそれが出てくる本体、すなわち木にあるからです。主を信じたわれわれはあたらしい木になった、というよりはイエスという素晴らしい木に接ぎ木されたということなのです。

さて今日の箇所は「良い木から良い実が、良い倉から良い物が出てくるよ」というお話です。私たちは毎日、人からの評価を受けたり、人を評価したりして生活しています。私は職場で生徒さんたちの成績を評価することがあります。しかし、それは同時に私自身が評価されることでもあります。日々の仕事においても、日常のたわいない交わりにおいてもその人の業績や才能に目が向けられます。すなわち、人の目というのは、実や物、自分で動かしたり使えたり、また目立つものに目が行くということです。

しかし、主にとってはその人の能力、才能ではなく、その人が何に属しているかの方がもっと大事なのです。主は良い木であり、良い倉です。だからこそそれに接ぎ合わされたわたしたちは皆が主の良い実、主の良い物と言えるのです。いや、むしろ声を大にしてそう言うべきなのです。主はこのようにして私たちをご自分の戦いの占領地として、大切にしてくださっているのです。

そこで気になったのが、この良い実、良い倉のたとえの前に「盲人が盲人の手引きをし」、「目に梁のある者が、目にちりのある者のちりを取る」たとえです。もちろんここでは主

イエスが、律法を使って他人を裁いているパリサイ人や学者を叱責するために語られたのですが、盲人、目にちりのある人、梁のある人とは果たしてパリサイ人だけなのでしょう。もちろん、私たちも盲人であり、目にちりや梁のある人といえましょう。そしてこの聖書箇所を読みながら、旧約のサムソンについて思い出しました。サムソンは親によって主にささげられ、その生涯は決してまじめとは言えないものでしたが、その長く伸ばした髪の毛によって、神にささげられた者としてしっかりと主につながっていました。そして、ペリシテの支配下にあったイスラエルの中で独自に活動をし、ペリシテからイスラエルを解放していきました。もちろんその過程というのは、神を知る者にはあるまじきような無茶な行動も多々ありましたが、ペリシテ人のリーダーたちを滅ぼしました。ある時ついに敵のわなに落ち、一度は捕縛され、目をえぐり出されます。さらに囚人とされ、宴会の見世物となります。しかし、再び長くなっていた髪の毛と共に力が戻り、最後には敵に大きな痛手を負わすことができたのです。この時、盲人のサムソンがなぜ戦えたのでしょうか。主とのつながり、聖霊によって導かれ、再び手にした怪力を発揮できたからです。

わたしたちはどうでしょうか。もちろん上に書いたように、主とはしっかりつながれています、接ぎ合わされています。そして、永遠のいのちという点では悪魔にも完全に勝利し、天国が約束されています。しかし、この地上では時に、自分の生活の中に見えてくる実が良いか悪いか、手に入れる物が良いか悪いか、そしてそれらが多いか少ないか、に一喜一憂し、自分たちが主の勝利の占領地として、主の国の一部となっていることをすぐに忘れてしまいます。

けれども、主はそんな私たちを決して見捨てず、霊的に盲目であった我々に寄り添い、目のちりを優しくとり、われらの目の梁にいたっては、十字架というかたちでそれを背負い、共にいてくださっているのです。イエス様はルカの福音書の中で盲人を手引きする盲人、目に梁のあるうぬぼれやを非難するだけではなく、ご自身をそのような者たちにゆだね、なすがままにされました。私たちの苦しみを体験してくださったわけです。感謝の言葉にたえません。

今この主の愛をしっかりとかみしめることこそ、自分が主の木であり、倉であることをいつも思い出させ、知らずに良い実をみのらせることになるのではないのでしょうか。今日、主に接がれていることをもう一度心から感謝いたしましょう。